

2019年
9月7日(土)～11月4日(月祝)
前期 9月7日(土)～10月6日(日)
後期 10月8日(火)～11月4日(月祝)
根津美術館 NEZU MUSEUM

— 日本・東洋の花鳥表現 —

美しい いのち

新創開館10周年記念企画展

Museum Collection Exhibition
Commemorating the 10th Anniversary of the Museum's Renewal

Beautiful Lives Birds and Flowers in Japanese and East Asian Art



色も形もとりのどりの花や、艶やかな羽を持つ鳥は、それ自体、洋の東西を問わず、古くから賞玩の対象とされてきました。ことに中国を中心とする東アジアでは、花や鳥を描く花鳥画が、人物画や山水画と並び、絵画の主要なジャンルとなりました。一方、現代ではスケッチの意味で使われる「写生」という言葉は本来、花鳥画において、対象を観察し、その形や生態、ひいては生き生きとした様子を写し取ることを意味するものでした。すなわち花鳥画とは、美しい動植物をモチーフに、いのちの輝きを描きとどめようとするものと言えます。

花鳥画に期待されたのは、生命感あふれる美しさだけではありません。珍しい花や空想上の鳥は、異国や極楽のイメージを喚起しました。また、外見的な特徴や性質、それを表す漢字の音などを根拠に、富貴や長寿、多産などの吉祥が託されました。さらに花や鳥は、絵画にとどまらず、工芸意匠にもなりました。

このたびの展覧会では、根津美術館の所蔵品によって、東洋、特に中国と日本における花鳥表現の展開をたどります。花鳥画がジャンルとして成立する前の、文様としての花鳥表現を鏡の装飾に見出すところからはじめ、南宋以降の精緻な着色花鳥画と粗放な水墨花鳥画の併存を経て、16世紀の日本で狩野派が中心となってその双方を融合するプロセス、さらに明清時代の作例に花鳥画の有する保守性と進取性をながめた上で、江戸後期の円山四条派や南画が達成した軽快な花鳥画作品をご覧ください。

根津美術館
NEZUMUSEUM

上: 花鳥図屏風(部分) 椿椿山筆 日本・江戸時代 嘉永5年(1852)【後期展示】
下: 染付白鷺文皿(部分) 肥前 日本・江戸時代 17～18世紀 山本正之氏寄贈
いずれも根津美術館蔵

<http://www.nezu-muse.or.jp>



第1章 古代中国の花と鳥—青銅鏡—

中国の絵画史において、花鳥画がジャンルとして確立したのは唐時代。しかしそれ以前から、器物や調度には、花や鳥が文様としてほどこされました。ことに霊力と吉祥が託された鏡には、天帝の使者である鳳凰や、外来植物ゆえのエキゾチズムと多産を象徴する葡萄など、シンボリックな動物植物モチーフがあふれています。



鏡の裏面の装飾。中央の鈕のまわりに、獅子と馬とともに、茎を交差させた瑞花と蝶、空想上の鳥・鳳凰を配する。

双鳳双獸八稜鏡

1枚 青銅
中国・唐時代 8世紀 村上英二氏寄贈

第2章 巧緻と濃彩のリアリズム—院体花鳥画と草虫図—

文化が爛熟した宋時代の宮廷画院は、絵画技術を究極まで高めました。花鳥画においても、細密な描写と精緻な彩色による写実的な作品を生みだします。一方、花鳥画と関わりの深い草虫図も、画院とは異なる環境で、装飾性と写実性を身につけました。院体花鳥画と草虫図は以降の中国、さらに日本の画家にとって、美の規範となりました。



【前期展示】

国宝 鶉図 伝李安忠筆

1幅 絹本着色
中国・南宋時代 12～13世紀

小画面に、野を歩く1羽の鶉を描いて、量感と動感に富む。超絶的な筆づかいで、翼の光沢ある硬い羽毛と、胸の白く柔らかい羽毛の質感も描き分ける。南宋時代の宮廷画院で制作された花鳥画は、鑑賞者に絵を見る力も求める。



【後期展示】

重要文化財 瓜虫図 呂敬甫筆

1幅 紙本着色
中国・明時代 14～15世紀

第3章 筆墨にやどるいのち—水墨花鳥画—

花鳥画には早く、対象を輪郭線でくくって彩色を加える装飾的なスタイル（黄氏体）と、線を用いずに描く野趣に富むスタイル（徐氏体）がありました。前者は院体花鳥画のルーツとなり、後者は水墨花鳥画の発展をうながしました。とくに、南宋末の画僧・牧谿の画風は、中世以降の日本の水墨花鳥画に多大な影響を与えることになります。

【おしらせ】

- ・ 絵画はすべて、
前期（9/7 [土] —10/6 [日]）と
後期（10/8 [火] —11/4 [月・祝]）で
展示替え、もしくは巻替えを行います。
鏡および陶磁は、全期間展示します。
- ・ 本資料掲載作品はすべて根津美術館蔵品です。

【後期展示】

重要文化財

竹雀図 伝牧谿筆

1幅 紙本墨画

中国・元時代 13世紀

枯木の枝に寄り添ってとまる2羽の雀。羽は濃淡の墨面、腹は淡墨の外隈により、姿形やボリュームが的確に描写される。水墨の滲みは、雨に濡れそぼった様子にも見える。日本の水墨画に多大な影響を与えた牧谿の作と伝承された。



第4章 うつわを飾る花と鳥—陶磁—

工芸品の意匠には、絵画に比べ、古様な題材や表現が保たれる傾向が認められます。古く江南地方で成立した「蓮池水禽図」が描かれ続けるのもその例です。水禽はやがて白鷺が主流となりますが、そこには「鷺」と「路」、「蓮」と「連」の音が同じであることから「一路連科」、すなわち科挙合格への願いが込められています。



ごさいれん ちすいきんもんおおがめ
五彩蓮池水禽文大甕 景德鎮窯
1口 施釉磁器
中国・明時代 16～17世紀



酸化コバルトの青い顔料で、蓮の枯れ葉に宿る白鷺をのびやかに描く。花は咲いていないが、伝統的な「蓮池水禽図」の系譜に連なっている。

そめつけしらさぎもんざら
染付白鷺文皿 肥前
1枚 施釉磁器
日本・江戸時代 17～18世紀
山本正之氏寄贈

第5章 漢画系花鳥画の到達点—狩野派と小栗派—

狩野派は、過去のさまざまな画風や技法を統合し、日本の絵画史に画期をもたらした流派です。それは花鳥画でも同様。牧谿にもとづく柔和な花鳥表現をベースに、多彩な筆墨、合理的な空間、ときに彩色や金も導入し、新たな地平を開きました。狩野派より前に足利将軍の御用を勤めた小栗派も、花鳥画の展開に独自の足跡を残しています。



【前期展示】

しき かしやうずびようぶ かのをものぶ
四季花鳥図屏風(左隻) 伝狩野元信筆
6曲1双 紙本墨画淡彩
日本・室町時代 16世紀

鳥たちの姿態や岩などの丸みを帯びた形態、柔らかな墨づかいは、牧谿に基づく。生きものの息吹、空気の動きを感じさせつつ、深々とした空間を構築する点も素晴らしい。



【後期展示】

ぼたんにねこず ぞうざん
牡丹猫図 蔵三筆
1幅 紙本着色
日本・室町時代 16世紀

牡丹に誘われる蝶を猫が見つめる。中国で老人を意味する漢字と音を同じくする猫と蝶は長寿のシンボル。猫は南宋以来、小画面に花とともに描かれた。

第6章 新たな表現を求めて—明・清時代の花鳥画—

絵画は常に、伝統と創造の接点にあります。「藻魚図」は、やはり江南を中心に古来、描かれた画題ですが、明時代には、水中と水上の景色を融合して絵画空間を刷新します。また、清時代初期の惲寿平は、没骨技法を彩色に応用し、清新な花鳥画風を生みだしました。ここでは、その画風を継承した銭維城の作品をご覧ください。

【展示期間中巻替えあり】

あきくさず かん
秋草図巻(部分)
せんいじょう
銭維城筆
1巻 紙本着色
中国・清時代 18世紀



第7章 江戸時代の「写生」—円山四条派と南画—

中世の日本の画家が宋・元時代の中国絵画を尊んだのに対し、江戸時代には多く明・清時代の作品が参照されました。モデルとなった中国画は多様ですが、本展では、^{うんじゅへい}恽寿平とその系統の影響を示す円山四条派や南画（文人画）に焦点を当てます。その軽やかで生き生きとした「写生」的な表現にも、花鳥画の本質が受け継がれています。



6曲1双屏風のうち、桃と柳、飛遊する4羽の燕を描く右隻。柔軟な水墨に淡彩が印象的にほどこされ、動きのある構成もあいまって、画面には生動感があふれる。中国・清の画家・^{うんじゅへい}恽寿平に傾倒した^{つぼきんざん}椿椿山（1801～54）の作。

【後期展示】

^{かちょうずびょうぶ}花鳥図屏風（右隻） ^{つぼきんざん}椿椿山筆
6曲1双 紙本着色
日本・江戸時代 嘉永5年（1852）

【前期展示】

重要美術品

^{かちょうずぶすま}花鳥図襖 ^{まつむらけいぶん}松村景文筆

9面のうち 紙本着色

日本・江戸時代 文化10年（1813）



その他の主な展示作品（予定）

梨花小禽図 伝銭選筆 1幅 中国・元時代 13世紀

枯蓮図 伝牧谿筆 1幅 中国・元時代 13世紀

柳燕図 単庵智伝筆 1幅 日本・室町時代 16世紀

白鷺図 海北友松筆 1幅 日本・桃山時代 16-17世紀

重文 青花花卉文盤 景德鎮窯 1枚 中国・明時代 15世紀

彫三島牡丹文扁壺 1口 朝鮮・朝鮮時代 15世紀

山水花鳥図屏風 狩野尚信筆 6曲1双 日本・江戸時代 17世紀

桜下麝香猫図屏風 狩野宗信筆 6曲1双 日本・江戸時代 17世紀

墨梅図 李方膺筆 1幅 中国・清時代 乾隆17年（1752）

竹に狗子図 長沢芦雪筆 1幅 日本・江戸時代 18世紀

展示室5 刀装具—驚きのわざ—

国内最大級の光村コレクションの刀装具から、^{ふちがしら}縁頭を中心に紹介します。4センチほどの世界に広がる極小の美をお楽しみください。



^{ひいろどう}葉先の緋色銅がアクセントとなり、細部まで彫りの妙技が冴える一品。一乗は刀装具最大の流派・後藤家の分家に生まれた幕末の名工である。

^{まくずかしら}菊図頭 ^{うめまくずふちがしら}（梅菊図縁頭のうち）

^{ごとういちじょう}後藤一乗作

1組 彫金・赤銅地

日本・江戸時代 19世紀

展示室6 ^{よながつき}夜長月の茶

日毎に夜が長くなる旧暦九月は夜長月とも呼ばれます。季節の茶道具約20件の取り合わせで、秋の訪れをお楽しみください。



^{あんなんそめつけとんぼもんちやわん}安南染付蜻蛉文茶碗

1口 施釉陶器

ヴェトナム 17世紀

安南（現在のヴェトナム）で日本の注文によって作られた茶碗。勝虫ともよばれる蜻蛉の文様や、作為的な胴部の歪みはまさに日本人好みである。

同時開催

関連プログラム

- 講演会** 「花鳥に寄せる思いとその表現」
 (事前申込制) 日時 10月5日(土) 午後2時～3時30分
 講師 宮崎 法子氏 (実践女子大学教授)
 会場 根津美術館講堂 定員130名
- 〈申込方法〉 当館ホームページの「イベント情報」の申込みフォームから、
 または往復はがき (1 参加者 1 イベントにつき 1 枚) に参加を希望されるイベント名・住所・氏名 (返信面にも)・
 電話番号を明記の上、
 〒107-0062 東京都港区南青山 6-5-1
 「根津美術館講演会係宛」にお送りください。
- ※9月5日(木)、午前10時より受付開始
 (往復はがきは当日の消印より有効)。
 ※先着順で定員になり次第締め切らせていただきます。
- スライド
 レクチャー** 日時 9月13日(金)、28日(土)、
 10月11日(金)、26日(土)
 (事前申し込み不要) いずれも午後2時から45分程度
 会場 根津美術館講堂 定員各回130名
- 担当芸員が展示会の見どころをスライドを用いて解説いたします。
 内容は、前期(9/7 [土]～10/6[日])と
 後期(10/8[火]～11/4[月・祝])で異なります。各回とも45分程度。
 事前申し込み不要。開始の15分前より開場。
- ※いずれのレクチャーも、先着順で定員になり次第締め切らせて
 いただきます。参加は無料ですが、入館料をお支払いください。
- 特別催事** ・「現代茶人の茶席」
 (事前申込制) 当館庭園内の茶室で、今を生きる茶人の皆様のお茶席を
 お楽しみください。
- 9月12日(木) 井田 純一郎氏
 (サンヨー食品株式会社 代表取締役社長)
- 9月22日(日) 内山 高一氏
 (フジテック株式会社 代表取締役社長)
- 10月31日(木) 筒井 紘一氏 (茶道資料館 顧問)
- ・ワークショップ「麗しのコサージュ(仮)」
 展示作品から抜け出したような、牡丹のコサージュを作りましょう。
 日時 10月19日(土) 第1回 午前10時15分～12時45分
 第2回 午後2時～4時30分
 講師 岡田 歩氏 (造形作家)
- ※いずれの催事も、後日詳細が決まり次第、当館ウェブサイト、
 催事チラシにてお知らせします。

開催概要

- 新創開館 10 周年記念 企画展**
「美しきいのち—日本・東洋の花鳥表現—」
- 主催 根津美術館
 開催期間 2019年9月7日(土)～11月4日(月・祝)
 開館時間 午前10時～午後5時(入館は閉館30分前まで)
 休館日 毎週月曜日、9/17(火)、9/24(火)、10/15(火)。
 ただし、9/16、9/23、10/14、11/4(いずれも月・祝)
 は開館。
- 入館料 一般 1100円 (900円)
 学生 800円 (600円)
 ※()内は20名以上の団体料金、障害者手帳提示者
 及び同伴者1名の料金。中学生以下は無料。
- 前売券 一般 900円 学生 600円
 ※2019年7月25日(木)～8月25日(日)
 企画展「優しいほとけ・怖いほとけ」開催期間中、
 当館ミュージアムショップにて販売
- アクセス 地下鉄銀座線・半蔵門線・千代田線(表参道)駅下車
 A5出口(階段)より徒歩8分、B4出口(階段とエスカレ
 ータ)より徒歩10分、B3出口(エレベータまたはエス
 カレータ)より徒歩10分
- 住所 〒107-0062 東京都港区南青山 6-5-1
 お問い合わせ Tel. 03-3400-2536 (代表)
 website <http://www.nezu-muse.or.jp>

【またどうぞ券】 「美しきいのち」展会期中、絵画は前期と後期ですべて
販売 展示替えを行うことから、2回目以降ご来館いた
 だくのお得な割引入館券を当館ミュージアムショップ
 にて販売いたします。ご入館いただいた翌日から会期
 最終日までご利用いただけます。「美しきいのち」展
 会期中のみ有効です。
 料金 一般900円 学生600円
 販売期間 9月7日(土)～11月3日(日)

記者内覧会の 2019年9月6日(金) 午後1時30分～3時(予定)
 ご案内 ご案内ご希望の方は、当館広報課へご連絡ください。

新創開館 10 周年。コレクションを未来へ。

根津美術館は、実業家 初代・根津嘉一郎 (1860-1940) の遺志により、
 根津家邸内に 1941 年に開館しました。2009 年 10 月、現館長・根津公
 一のもとで隈研吾氏設計による現在の展
 示棟が完成。新しい時代となった今年、
 新創開館 10 周年を迎えました。これか
 らも年 7 回の展覧会を通じ、日本・東
 洋の古美術のもつ奥深い魅力を未来に伝
 えてまいります。



次回展

かわかみふるはく
 特別展「江戸の茶の湯—川上 不白 生誕 300 年—」
 2019 年 11 月 16 日 (土) ～ 12 月 23 日 (月)

江戸千家流を開いた川上 不白 (1719-1807) は、諸大名の間に茶の湯
 の文化を広めました。記念の年にあたり、江戸の茶の湯を顧みます。

やはぐちみつきみずさし もくらい
 矢筈口耳付水指 銘 雲雷
 備前 日本・桃山時代 17 世紀
 根津美術館蔵



同時開催：
 展示室 5 「平家物語画帖
 —知っておきたい名場面—」
 展示室 6 「口切の茶事」